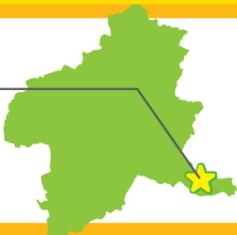


貴重な伝統芸能を掘り起こして復元

## 邑楽町伝統文化掘り起こし協会

邑楽町



衰退していく各地の伝統芸能や年中行事を無償ボランティアで調査し、掘り起こして復元。復元された多くの里神楽や祇園囃子などは、地域の祭りで再現され、人々を感動させている。



しの笛を吹く渡辺さん。その音色は非常に美しい



渡辺さんの獅子舞踊りに、子どもたちも興味津々

### ●活動内容

北関東を中心に、地域に根付いた郷土伝統芸能を掘り起こして継承していくため、自ら足を運んで調査し、復元しているのが代表の渡辺幾雄さん(69)だ。

渡辺さんは、伝統芸能に欠かせない踊りや歌、笛など、全てを習得しており、どの地域から掘り起こしの依頼がきても対応できる。かつての姿を忠実に復元しなくてはならないため、その土地に足を運び、保存会や愛好会の方々に協力してもらいながら、科学的な調査を進める。

小学校では、子どもたちに伝統芸能に触れる機会を作って交流するほか、障害者に八木節を教えたり、里神楽、獅子舞、豊年万作踊りなどの教室も開催している。他にも、祭礼囃子や獅子舞、盆踊りなどに用いる、しの笛と呼ばれる横笛の教室や、伝統芸能の講演依頼も多い。会員は主婦や元教師、もともと伝統芸能をしていた人など、実にさまざま。渡辺さんが復元した伝統芸能を見たり、しの笛教室に参加して、この活動に興味を持った人が集まった。現在は、協会の会員として、伝統芸能を発表している。

### ●事業を始めたきっかけ

「昔は里神楽があった、農耕作踊りもあった。ととても良かった。もう1回見てえ」。

今から41年前、地域の「老人の集い」に出席していた高齢者の言葉が、渡辺さんの心を動かした。

その時、渡辺さんは、子どもの頃に神楽殿や演芸会の舞台を夢中になって鑑賞したことを思い出した。それは非常に楽しい思い出として、鮮明に記憶に残っていた。さらに、19歳の時に東京都の古刹で知られる神田明神で体験した、しの笛の音色が蘇った。

その当時でさえ、地元の伝統芸能は衰退・形骸化し、祭りの際に里神楽や祇園囃子が披露される機会も失われていた。子どもたちは、それらの伝統芸能を全く知らない。このままでは、あの音色は永遠に失われてしまう。「誰かがやらなければならない」と奮い立った。県内には伝統芸能を掘り起こすボランティアをしている団体がなく、地元の人から復元してほしいとの要望があったことから、活動を始めた。



口くさり音譜表を利用し、参加者と一緒に演奏する

### ●工夫している点・特長

協会には、日本で最初の女性神楽師がいる。元来、神楽は歌舞伎と同様に、女性は入れてはいけないのだが、皆と一緒に協力していきたいという思いから、渡辺さんは快く受け入れた。最初は他の団体から猛反対されたが、その熱心な取組の姿勢により、認められるまでになった。今では、男性以上に女性会員が大活躍している。

しの笛教室では、独自の「口くさり音譜表」を用い、楽譜の読めない参加者にも演奏が出来るように工夫した。これまで、小学生からシニアまで2,000名以上の

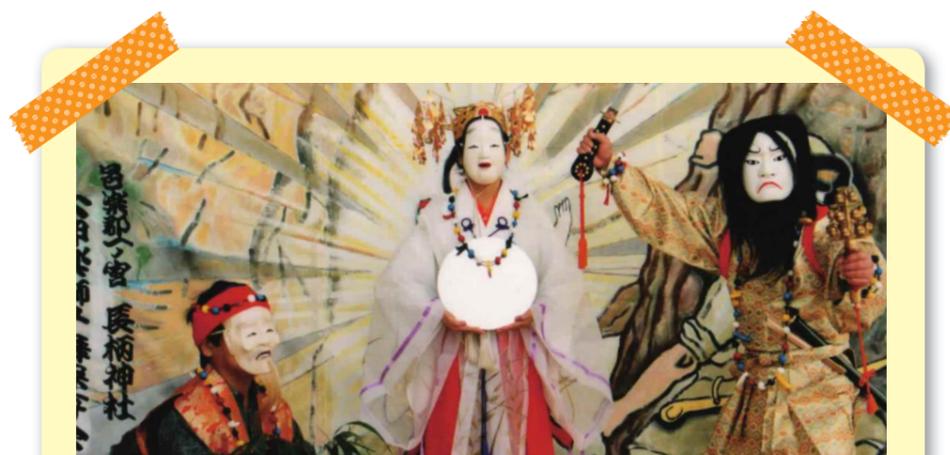


獅子舞で祭りに参加。地域住民と記念スナップ

方が習得しており、大変好評である。

復元した数々の伝統芸能や年中行事を、会員の皆さんと発表することで、保存や継承に努めている。老人会や福祉施設でも発表しており、とても喜ばれている。

全国的に伝統芸能が衰退・形骸化していく中で、渡辺さんのような再生活動を行う団体は現在皆無である。各地にある貴重な伝統芸能を守り、次世代へと継ぐためには、保存会や有識者、行政、コミュニティが一体となって守っていかなければならない。地域全体が同じ思いを持ち、協力していくことが大事なのだ。



### 〈やりがい・楽しみ〉

長く活動する中で、現在は北関東の26市町村で復元に成功した。「一つのことを復元するには、1年や2年は軽くなってしまうが、いくつもの地域で掘り起こし作業が終わり、町長や区長、保存会の皆さんがとても喜んでくださ

りました。復元された里神楽などが披露された時の喜びは、何にも勝るものがあります。苦労もありますが、その苦労を楽しみ、一生の学びとして、今後も精力的に活動を続けていきたいと思っています」と、渡辺さんは語る。

### 基礎データ

☎0276-88-1033

伝統文化掘り起こし協会  
代表: 渡辺 幾雄

事業開始時期/昭和48年

主な活動/

各地域の伝統文化の掘り起こし、伝統芸能の発表、しの笛などの各種教室、講演会など

人数・年齢/

15名 50~82歳

